

《定住促進》

あやべし
京都府綾部市「里山ねっと・あやべ」



定住促進

あやべし 京都府綾部市「里山ねっと・あやべ」

地域資源「農村」を活用した交流人口拡大と定住促進

交流から定住へ！

体験型交流でつくった綾部ファンを将来の定住につなげる

一見何の変哲もない農村風景が広がる集落。しかし「普通の農村」の美しさに気づいたときに取り組みの第一歩は始まった。豊かな自然、美しい風景、多様な里山文化、経験と知恵を有する人々の暮らす農村は都市にとって貴重な財産。自然に直接触れて癒しやゆとりのある「田舎暮らし」を体験するために、あやべファンがこの地を訪れる。

行政が主導して立ち上げた組織が徐々に地域住民の取り組みへ脱皮していく過程では様々な人物の思いや願いが交錯していた。地域の人々が自分たちの故郷の魅力に気づき、誇りをもつようになるまでのストーリーとは――？



◆取り組み概要

●取り組みの目的

地域資源「農村」をもとに都市農村交流を活性化し、獲得したあやべファンを定住に結びつける。

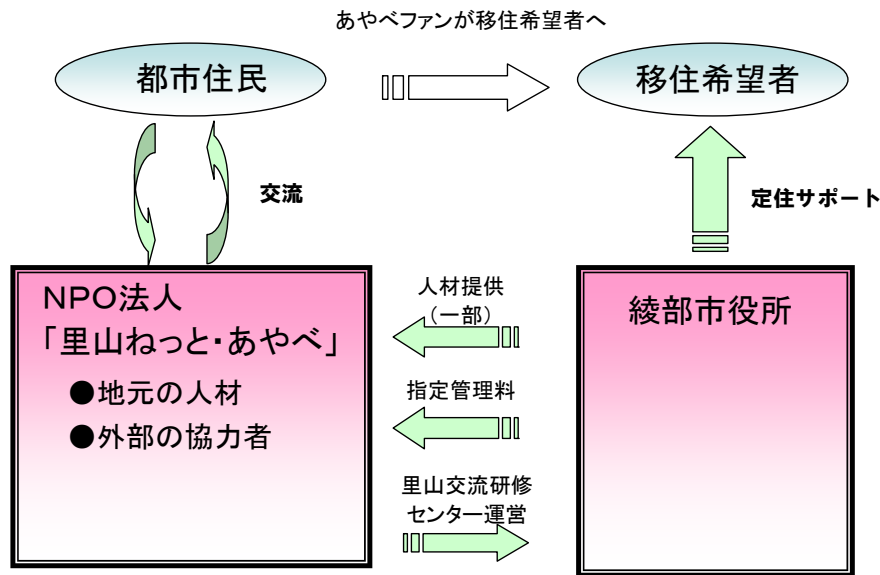
●取り組みの内容

- ・民泊、農村体験などの都市農村交流事業の活性化
- ・集落の空き家情報提供、移住希望者に対する相談受付などの定住サポート

●取り組み主体

- ・NPO法人「里山ねっと・あやべ」
- ・綾部市役所

◆取り組み体制



◆取り組みのポイント

1. 市が立ち上げ、民間が運営するNPO組織

廃校になった小学校の施設を活用した都市農村交流を行なう組織を行政主導で立ち上げ、取り組み主体を徐々に自立した民間の市民組織として成長させる。

2. 「普通の生活」に着目した農村体験

地域資源は「普通の農村」！あるがままの農村の姿で無理なく都市住民と交流し、あやべファンを獲得する。

3. 交流から定住に向けた地域の取り組み

地域に存在する空き家を、移住を希望する都市住民の受け皿として活用。情報提供、定住相談などを市がサポートする。

4. ターゲットに応じた情報発信の仕組み

「情報発信しないのは存在していないのと同じ」という考えのもと、遠隔地のあやべファンにはホームページ、ブログで発信。市内の人には地域新聞などで取り組み情報を提供する。

取り組みによる成果

- ・都市農村交流の推進により、綾部市の集落に訪れる都市住民が増加した
- ・「外からの目」に触れることで、集落の住民が自分たちの地域の魅力を自覚するようになった
- ・空き家情報の提供などの取り組みの結果、都市からの移住者が増えた

今後の展望

- ・取り組み主体である NPO 法人「里山ねっと・あやべ」の収益力の向上により綾部市から自立した組織への脱皮
- ・若い世代を中心とした都市からの更なる移住促進

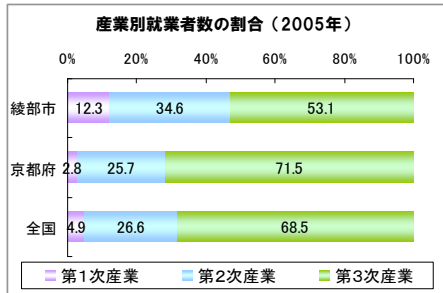
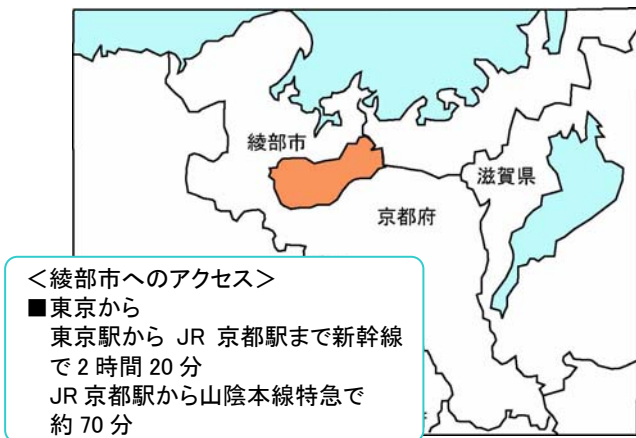
綾部市の概況

人口減少・高齢化に悩むまち

綾部市は明治以来、養蚕で栄えた町であるが、全国的に農山漁村地域で過疎化が進む中、綾部市においても同様の傾向があり、平成17年国勢調査時点で約38,000人にまで人口が減少している。近年市内で住宅団地が開発された結果、地域内で世帯分離が進んでいるため、人口が減少する一方で世帯数は増加傾向にあるのが特徴だ。

市内には人口の半分以上が高齢者である集落が数多く存在している。またこのままでは冠婚葬祭など社会的共同生活を維持していくことが困難とされる集落「水源の里¹⁾」も5箇所存在している。

1) 以下の条件を満たした集落を綾部市では「水源の里」と位置づけ、重点的支援の対象としている。①綾部市街地（市役所）からおおむね2.5km以上離れている。②高齢化率が60%以上である。③世帯数が20戸未満である。④集落が水源地域である。



綾部市の産業構造とインフラ整備

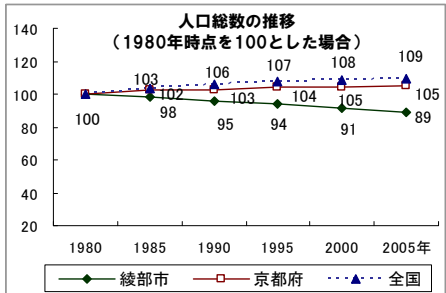
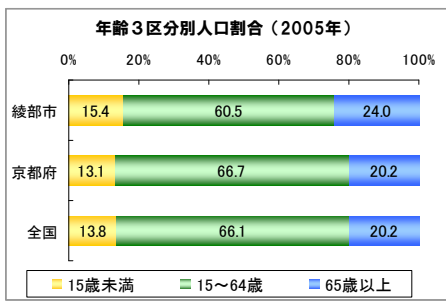
中山間地域を抱える市として、全国や京都府の平均に比べて第1次産業の比率が高いが、綾部工業団地を擁する工業都市としての側面もあり、特に市街地を中心に第2次産業に従事する人口も多いのが特徴である。

また観光資源の面でも地域内に差が発生しており、温泉などの観光資源は市の東部に集中して立地している。

取り組みに至る経緯

里山ねっと・あやべの立ち上げ

綾部市における取り組みは1998年から始まった第4次綾部市総合計画（計画期間：2001年～2010年）策定に向けた検討時点までさかのぼる。当時綾部市の人口は最盛期であった1950年の70%にまで落ち込んでおり、将来に向けたグランドデザインをいかに描くかが重要なテーマになっていた。総合計画中ではこれからの時代、特に地方部ではバラ色の未来を描くことは困難



出典) 総務省統計局; 国勢調査

であるという四方八洲^{しかた やすお}男前市長の判断で『今ある綾部市の地域資源を発掘していくこと』に着目していく方針が示された。

全く新しい事業を始めることや、それを維持していくことの困難さを自覚して、今ある綾部市の地域資源を発掘しながら人口減少を食い止め、綾部市の活性化をすすめていくことに重点が置かれたという。

そうした背景のなか、特別なイベントではなく、「普通の農村風景や地域の風習」こそが綾部の真の地域資源であるという考え方のもと、市が音頭を取って、「都市との交流と定住促進」を目的とする里山ねっと・あやべが 2000 年の夏に立ち上げられた。

里山ねっと・あやべのミッション

人口減少を食い止めるといっても、外の人にむかって交通の便の悪い綾部市にいきなり住んでくださいというのも無理な話である。そもそも当時は全国的に綾部市の知名度が低かった。

「府外からは『京都』イコール『京都市』というイメージしかもっておらず、綾部市をはじめとするほかの町はすっかり埋没していました。なに

より綾部市を外の人に知ってもらうことが第一歩だと考えました」と当初から取り組みに関わっていた綾部市役所の永井 晃^{ながいあきら}氏（現在は綾部市企画部企画広報課主幹）は当時を振り返る。「人口減少を食い止める」といった大テーマにいきなり真正面から取り組むのではなく、「都市農村交流を通じたあやべファンの獲得」に着目した点が取り組みのポイントである。

Point 「普通の農村風景」こそが美しい

里山ねっと・あやべの発起人として当初から取り組みに関わり、理事長を務める京都大学の^{にいやまようこ}新山陽子教授（地域人材ネット登録者）は語る。

「例えば京都市に住んでいる方が『美しい農村風景』を求めてヨーロッパに旅行に行き感動して帰ってくることでよくあると思うんです。でも京都府の約 8 割は中山間地域で、足元に目を向ければ身近に美しい自然風景はたくさんある。農村地域は都市の人にとっても貴重な財産であり、農村地域も都市の人の力を必要としている。都市と農村はお互いに必要としあっている。農山村地域は農山村地域のためだけのためにあるのではなく、都市の人々にとっても共有財産にしていける、協働によって、そんな新しい考え方を創っていくことが必要というのが組織を立ち上げる際の共通認識でした」

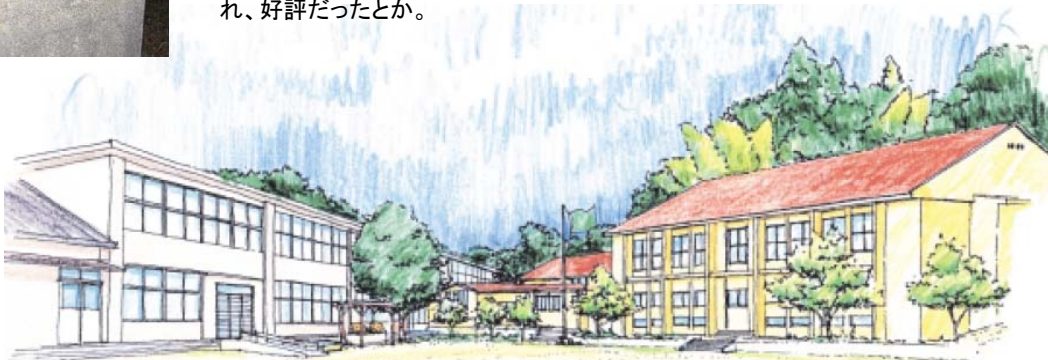


→里山交流推進センター

旧豊里西小学校の跡地を利用した宿泊可能な施設。体育館や二宮金次郎の像がそのまま残されている。

「里山交流大学」などの里山ねっとの取り組みの際に利用されるほか、部活の合宿などでも利用される。夏のシーズンなどはほぼフル回転するほど盛況だという。

最近では、小学校の卒業生の同窓会にも利用され、好評だったとか。



出典) 里山ねっと・あやべ HP: <http://www.satoyama.gr.jp/> (2009/11/30 参照)

旧小学校の施設の活用

新山教授は「役所の方も社会起業家の方も、とにかく企画力・アイデア力のある人が集まったことが里山ねっと・あやべの特徴」と語る。

里山ねっと・あやべのアイデアのひとつとして、廃校になった小学校の施設を活動拠点として活用していることが挙げられる。廃校になっていた豊里西小学校を「里山交流研修センター」として里山ねっと・あやべの事務局機能を持たせて活用した。「これだけの規模の施設を新しく建設するお金は今の市にはない。廃校を活用して何か地域おこしの起爆剤になるようなことができないか」とメンバー間で議論がなされた結果である。

学校施設を事務局として活用する一方で、交通の不便な綾部市でイベントを行うにあたっての、宿泊施設として活用したいとの思いも当初からあったという。しかし宿泊施設としての採算をとれるか、宿泊施設を活用できるだけの交流事業ができるかなどの問題があったため、宿泊機能の拡充は里山ねっと・あやべの活動が成熟する2006年まで持ち越されることになる。

宿泊施設の不足を逆手にとった民家宿泊

深刻な「泊まる場所不足」が課題として残るなか、里山ねっと・あやべの理事の一人で、酪農を営む村上正^{むらかみまさし}氏から「民家への分宿」という解決案が出された。酪農家である村上氏の家には、それまでも農林学校の実習などで学生を長期受け入れしてきた経験があり、ノウハウの蓄積があったのだ。民家宿泊については、もともと田舎暮らし体験として構想されていたこともあり、実現に向けた検討がなされた。

「民泊」というアイデアの可能性を探るためには、実際にやってみるのが手っ取り早い。自らも綾部市にUターンし、「半農半^{イカ}X²⁾」という生き方を提唱している、里山ねっと・あやべの創設時からのメンバーである塩見直紀^{しおみなおき}氏ら主要メンバーが、宿泊受入れ民家探しに奔走した結果、8軒の民家の確保に成功し、「田舎暮らし初級ツアー」として試みが始まった。

「これまで他所の人を泊めたことなどない付近の集落の人に、ただ頼み込むだけでは断られて

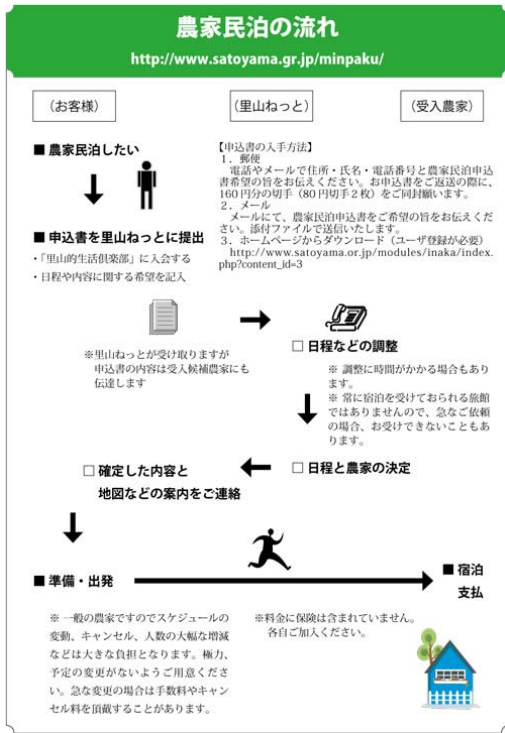
2) 生活に「農」を取り入れつつ、自分の個性、才能を発揮する生き方。塩見氏は「半農半X研究所」を主催する社会起業家でもある。



↑ 農村体験の様子

左からシイタケ栽培、米づくり、パン焼き窯の様子。里山ねっと・あやべでは民泊以外にも田舎暮らしを体験できる都市農村交流の取り組みがされている。そばうち体験など、コースによっては、1日だけの参加で終わらずに、年間を通じて何回も綾部を訪れるものもある。

出典) 里山ねっと・あやべパンフレット



← 農家民泊までの流れ

農家民泊の体験には、里山的生活倶楽部への入会が前提となる。一見面倒な申し込みシステムであるが、それだけに「いい加減な気持ちの人」はあまり申し込んでこないという。

出典) 里山ねっと・あやべ HP

http://www.satoyama.gr.jp/(2009/11/30 参照)



↑ 受け入れ民家

綾部市の集落部で5軒の民家が現在受け入れを実施している。なかには町の中心部から車で数十分かかるところもある。

出典) 里山ねっと・あやべパンフレット

しまいます。自分からまず率先して受け入れに名乗りをあげました」と塩見氏は語る。

その後、民泊は里山ねっと・あやべの主な取り組みのひとつとなり、現在は5軒の民家が受け入れを行っている。

現在の取り組み

「あやべファン」拡大に向けた体験型交流

里山ねっと・あやべが主体となって、農村体験交流に取り組んでいる。取り組み内容は「石窯パン焼き体験」、「里山そば塾」、「米作り塾」、「茶摘み・収穫体験」など多岐にわたるが、「できる範囲で、普通のことを」が共通したテーマである。

綾部には、「特別な」農村があるわけではない。だからこそ「そこにある農村を、そのまま見せる」やり方が有効なのだという。

例えば農家宿泊体験では、農村体験として「まき割り」「風呂のたきつけ」などを体験することもできるが、決してメニュー化された「農家の暮らし体験」をこなすツアーにはなっていない。極端な話、都会から来た人は、ただ現地でのんびり

するだけでもいい。

なるべく現地の人と自然な交流、偶然の出会いを大事にすること。これが、あやべ流都市農村交流のポイントである。

あやべファンの育成から定住へ

里山ねっと・あやべ自体は交流人口の増大と緩やかな定住促進を目的とした組織としてスタートしたが、都市の人に農村にあるもので遊んでもらうことが目的ではなかった。「綾部市への移住に興味を持つ年齢層は大きく2つに分かれます。定年の時期を迎えつつある団塊の世代と、田舎で農業をしたいという30代前半の世代です。でも往々にして若い定住希望者は農村でやっていくビジョンに欠けることが多い」と、現在は定住促進に携わる永井氏は語る。

農業体験、しいたけ作りなど、里山ねっと・あやべの体験型交流メニューのなかには農村で生活するための技術を伝える意味合いもある。またそれ以上に、定住希望者に農村暮らしを疑似体験してもらい、イメージをつかんでもらうことで「こんなはずじゃなかった」というケースを避けられたらというのが里山ねっと・あやべの願いだ。

Voice

民泊協力者

ひとみつきお
人見次男 氏



退職を機に、奥様の実家のある綾部市に引越してきた人見氏は、Uターンして間をおかず民泊に参加した。実直な人柄が来訪者に人気。

「あまり飾らずに接するようにしています」

Q. 取り組みに関わった経緯を教えてください。

もともとは大阪で、夫婦共働きで勤めていました。妻は栄養士でしたが、「お客さんにおいしく食べてもらえる仕事をしたい」とずっと考えていたようでした。退職を機に妻の実家の綾部にUターンしてきた後、自分の知り合いに離れを開放して、手料理を振舞ったり滞在したりしてもらっていました。そうこうしているうちに、知り合いを通じて「里山ねっと・あやべでもっといろいろな人に泊まりに来てもらったらどうか？」と誘われて民泊に参加するようになりました。

Q. 来訪者をもてなすにあたって気をつけていることはありますか？

サービス業で民宿をやっているのではないので、来てくれる方に対してもあまり飾らずに接するようにしています。一緒に夕食をとって自分の昔話をしたりとか、裏の畑で野菜を収穫して食べたりすることとか、普段自分がしているのと同じ普通の暮らしをしてもらいます。

Q. これからも続けていきたいと思いませんか？

お客さんが来て、喜んでもらえる自分達も嬉しいし、生活にハリが出てきたと思います。

国内のみでなく、ブラジルなど海外からもお客さんが泊まりに来たりして刺激がありますし、中には部屋に置いてあるノートに詩を書いていってくれる方もいるんですよ。これからも無理なく楽しみながら続けていきたいと思っています。

Voice

里山ねっと・あやべ

しおみなおき
塩見直紀 氏



里山ねっと・あやべの立ち上げ時からのメンバー。農のある暮らしをしながら自分の個性を活かして生活する「半農半X」を提唱しており、賛同者が移住者になることも多いという。

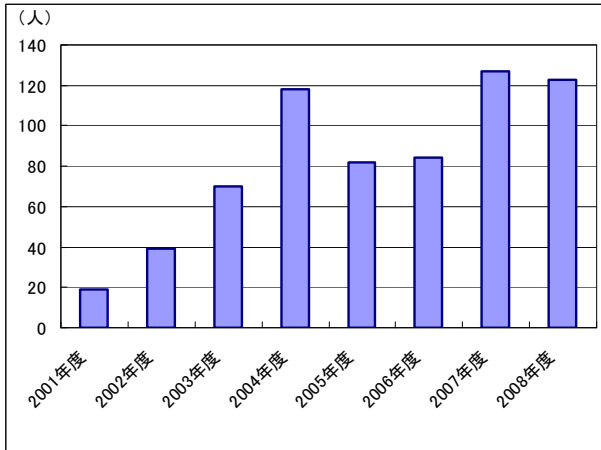
「だんだん地域の人に関わるようになりました」

Q. 取り組みに関わった経緯を教えてください。

「33歳までに自分の生き方をリセットする」というのが自分のモットーで、99年に生まれ故郷の綾部市に戻ってきていました。ちょうど里山ねっと・あやべの設立構想があった時期と重なっていて、市の企画広報課の嘱託職員扱いで取り組みに加わりました。発足初期は市役所の永井氏らと計3名のスタッフで業務に当たっていました。

Q. 当時から比べて取り組みの雰囲気の変化は？

当初はかなり「外の力」が入った組織だったと思います。市長のネットワークなどで、大学の先生が多く取り組みに関わっていました。当時は周囲の人はだれも「綾部が観光地になる」なんて思っていませんでしたが、取り組みが軌道に乗り、活動が情報発信されるにつれて地域の人々の参加が目立ってきたと思います。



↑ 民泊参加者の推移

宿泊場所の不足から始まった民泊は、現在では毎年100人以上が訪れる、里山ねっと・あやべの代表的な取り組みに成長した。飾らない田舎暮らしを体験できると評判だ。

出典) 里山ねっと・あやべ資料



↑ 今回お話をうかがった人見氏のお宅

里山ねっと・あやべからほど近いところに立地しており、家の隣にはかつて養蚕を行っていたコンクリートの小屋が残っている。

空き家を活用した定住促進に向けて

現在、綾部市への定住促進は、綾部市役所の企画広報課が主担当となって取り組んでおり、都市からの定住促進に向けて集落の空き家情報の提供、移住相談などを行っている。

空き家活用の取り組みの発端は1998年に、市役所職員が中心となって実施した集落地域の空き家調査に始まる。その際には922戸もの空き家の存在が確認された。その後の追加調査で、実際に不動産として流通可能な状態にあるのは380戸程度であることがわかったものの、綾部市の集落には想像以上の移住者受け入れのポテンシャルがあることが分かったという。

現在では、物件を売却または賃貸に出したいオーナーからの申し出があった場合「あやべ空き家情報ガイド」で情報提供するなど、行政として都市住民とオーナーをつなぐ役割を果たしている。

ただし実際に借り手や買い手がついたのは10年間で28件と、決して順調とはいえない。物件のオーナーが必ずしもお金に困っておらず、空き家の活用に対して前向きなケースが少ないことが理由であるが、「地域の雰囲気」も原因として

大きいと永井氏は分析する。

「集落はのんびりしているようで意外と忙しい。地域の祭りや毎月の溝掃除など、集落単位での活動にきちんと参加できて、周りの人とコミュニケーションできる人でないとうまくやれないんです。なかには都会のライフスタイルをそのまま持ち込もうとする人もいて、周りの人が不満を抱く場合もあります。そうした場合、批判の矢面に立たされるのはオーナーになることが多いのです。貸主もそれがわかっているので、外の人にあえて家を提供した方がないことが多いです」

ただし同じ綾部市内でも地域によって雰囲気は大きく異なり、若い世代がスムーズに入っていけるかどうかは相性によるところが大きい。定住希望者本人の意思だけでなく、農村暮らしに対する適性や、地域との相性も踏まえてアドバイスすることも永井氏の仕事のうちだ。



↑ 里山ねっと・あやべが発行する二十四節気ごとのメールニュース
更新頻度は概ね 2 週間に1回。更新するのは事務局の役目である。内容は里山ねっと・あやべの取り組みのお知らせや季節の話題など。登録していなくてもバックナンバーは閲覧可能である。
出典) 里山ねっと・あやべ HP <http://www.satoyama.gr.jp/mt/newsblog/> (2009/11/30 参照)



移住実践者
はげやま
檀山さおり 氏



檀山さん一家は3ヶ月ほど前に上林地区に移住してきた。ご主人は邦楽のミュージシャンをされており、「綾部の森の中を歩いているとインスピレーションがわく」と、周囲の自然を気に入っている。

「移住へのハードルが低いのが決め手でした」

Q. 綾部に移住することになった経緯を教えてください。

主人が3年ほど前に綾部の温泉に来たときに風景を気に入ったのが始まりです。子供が歩けるようになるまでに田舎暮らしを始めたいと考えていたため、綾部市が候補地に上がり、その後何度か現地を訪れるうちに移住を考えるようになりました。

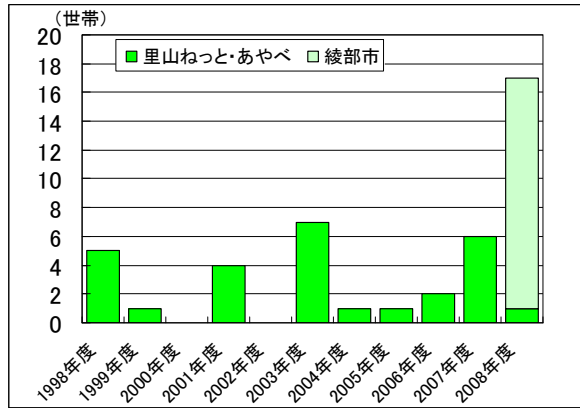
上林地区に移住されている料理研究家の方のところに通っていたこともあり、綾部市の中でも上林地区が希望地になりました。地域の知り合いもない私達にとっては、インターネットで情報を得られるのがたいへん助かりました。集落の空き家情報をインターネットに掲載している綾部市のような例はまだまだ少なく、他の地域に比べて移住に対する環境が整っており、受け入れ先としてのハードルが低かった点も良かったと思います。また、綾部市の場合は移住のメニューが「永住」だけでなく、期間にとらわれず「移住」する世帯も支援する姿勢があることも印象的で、賃貸で暮らすという選択肢もあり、割と気軽に家探しができました。

Q. 地域での生活について教えてください。

周りに住んでいるのは 80 歳代のおじいちゃんおばあちゃんが、うちの子どもが集落で一番小さいです。近所のおばあちゃんが、野菜を持って赤ちゃんをあやしに来てくれたり、温かく受け入れてもらっています。他にも自治会や神社のお祭りなど、行事はたくさんありますが、私達は夫婦ともにそういう近所づきあいが全然苦にならないので、こういう地域暮らしに向いているのかなあって思います。

Q. 生活するうえで必要な支援はありますか？

移住するときには綾部市役所の方が色々親身になって相談にのってくれましたが、やはり引っ越した後は少し疎遠になってしまったかなと思います。また、綾部市ではU I J ターン者や地域活動実践者の方からなる「定住サポート隊」という組織があって、地域に住むようになってから相談にのってもらったりもしていますが、もう少し「目に見える支援」があるといいかなと思います。例えば下水料金の課金の際に0歳児などの幼い子どもはカウントしないようにするとか、若い世帯を呼び込むための手段はいろいろあるように思います。



↑ 里山ねっと・あやべ、綾部市の空き家情報提供による移住世帯数
2008年度から綾部市が空き家情報を提供しており、取り組み初年度には16世帯を綾部市に誘導した。

出典)綾部市資料

←綾部市が発行する空き家情報パンフレット

空き家のオーナーから市に申し出のあった物件に対しては、パンフレット、インターネットで情報提供をする。

物件によっては、そのままの状態で居住することが困難で、買主/借主が改修する必要があるものもある。

出典)綾部市資料

取り組みのポイント

都市住民に向けた情報発信

里山ねっと・あやべのホームページ・ブログは社会起業家の塩見氏が手がけてきた。「情報発信しないなら存在していないのと同じ」ということばを知り、発信に力を入れており、他のNPOとは一味異なる斬新なデザインのホームページが好評である。

里山ねっと・あやべの情報発信手段としては、ホームページや二十四節気ごとのメールニュース、ブログなどを活用するほか、イベント等があるたびに、地域の有料新聞である「あやべ市民新聞」に情報が掲載されるなど、地域密着型の情報提供も継続的に行っている。

外の人と地域の人の出会いの仕組みづくり

最近では単純な広報活動のみでなく、外部の社会起業家やまちづくりの実践家等を講師に招く「綾部里山交流大学」の試みも行っている。2泊3日で講演を聴くほか、石窯パン、味噌づくりなどの地元の人が講師となって都市の人と交流することが狙いだ。「ここはただのレジャー施設で

はなく、綾部市に遊びに来てもらうこと自体が目的ではない。都市農村交流を謳うからには、いかに地元の皆さんに主体的に関わってもらうかが重要です」と前田氏は語る。

取り組みの成果

交流人口の拡大、定住人口の増加

取り組み開始時に約650人/年程度だった交流事業参加者は、2007年時点で約2,000人/年までに増加した。今後さらに増加するのではないかと前田氏らは期待する。

また、取り組みにより、集落に移住を希望する人のパターンも変化してきたという。老後の生活を自然の中で過したいというリタイア層だけではなく、最近では「自然のなかで農業をしたい」と志す若者が見られるようになってきたという。限界集落が点在し、耕作放棄地の問題も顕在化している綾部市の思いとしては、やはり若い世代に綾部の良さを知って入ってきてもらいたいという。「自分たち市の職員ができることなら何でもやります」と永井氏は声を上げる。

↑ 里山交流大学

社会起業家の講義を2泊3日で聞くほかに、地域の人が講師となって教えるプログラムも存在する。

最近では外部講師よりも評判の良いケースも出てきたとか。

出典) 里山ねっと・あやべ HP <http://www.satoyama.gr.jp/> (2009/11/30 参照)

↑ 情報発信の取り組み

ホームページでの情報発信のほか、珍しいかたちの情報発信の在り方として、動画共有サイトで、一部の取り組みを公開している。

出典) 里山ねっと・あやべ HP (2010/03/31 参照)



里山ねっと・あやべ
事務局長

まえだよしのり
前田吉範 氏



里山ねっとが NPO 法人化した2006 年度から組織運営に参加する盛りする。里山交流研修センターの整備で、取り組みの自由度が高まったと今後の運営に意欲をにじませる。

「人と人との出会いの場としての機能が大きい」

Q. 情報提供について心がけていることを教えてください。

心がけていることとして、「地道でも継続して情報を発信し続けること」があげられます。

また遠くの人に対する情報発信にはインターネットが有効ですが、集落ではネット環境が整っていないことも多いので、周辺の人に対する情報提供には地域新聞が有効です。

綾部市では約7割の世帯が「あやべ市民新聞」を購読しており、有効なツールになっています。あやべ市民新聞は「記事に出てくる人が大体知っている人」なので、読者が親近感を持ちやすいですね。もっと大きい都市だと記事と読者の距離が離れてしまうし、小さすぎると今度は新聞の経営自体が成り立たないからです。

また、それ以外にも各種メディアにプレスリリースなどでこまめに情報発信するようにしています。その結果、昨年度は全国放送のラジオやテレビでも取り上げられました。

Q. 里山ねっと・あやべの取り組みの特徴はどこだと思いますか？

「できることをできる範囲で」というのが大きな特徴かと思います。里山ねっと・あやべが行っている「米作り塾」にしても「そば塾」にしても、農村ならどこでも営んでいることを基礎に都市との交流の場にしています。ここでの取り組みは、里山ねっと・あやべが主体的に事業を進めていくことももちろんありますが、地元の方や外部の方の出会いの場や取り組みの手伝いをする場としての役割も大きいと思います。もともと地元の方が独自にやっている活動にボランティアを派遣するなど里山ねっと・あやべがお手伝いしたことからはじまっている取り組みもあります。

地域の人の意識の変化

「農村の人は、都市から来た人が農村の景色に感動しているのをみてはじめて地域の魅力に気づくことがよくある」という気づきを取り組みを始めるきっかけのひとつであった。外部から観光客が訪れなかった綾部市に、外の視線に接することになり、まちの人々の意識も変化しつつある。

「綾部里山交流大学でも、最近では外部講師に負けず、地元の方の講師も大変評判が良いです」と塩見氏は語る。

今後の展望

「普通のNPO」にむけて

立ち上げは行政主導で行われたが、組織として自立する必要性は当時から共有されていた。「都会ならば、廃校を活用した地域活性化に取り組んでくれる民間の組織はたくさんあるでしょうが、綾部ではそれは望めない。少なくとも始めの段階で行政が関わることは仕方がないと思います」と永井氏は語る。

2006年にNPO法人化した里山ねっと・あやべは里山交流研修センターの指定管理者として活動している。

現在は組織運営費のうち、指定管理料、及び国などからの補助金が約40%に対し、独自事業から得られる収入が約60%である。今後独自収入の比率をさらに増やして、行政から自立した組織としていくことが、里山ねっと・あやべ、綾部市双方の願いである。

「数年前までは綾部市からの収入がほぼ8割を占めていました。里山交流研修センターという『収入を生み出す施設』が整備されたので、活動の自由度は高まってきています。設立当時ほど市は関与していませんが、なるべく早く『普通のNPO』になる必要性を感じています」と前田氏は語る。

外からの人、地域の人々が一体となって、新たな取り組みを創造しているところに、里山ねっと・あやべの強みがあるといえるだろう。